町史とっておきの話 246

只見野鳥雑記 ③

ハクチョウがやってきて増えたカモ

日本野鳥の会会員
新国 勇

◀ハクチョウに給餌する岩渕義寿さん（2000年1月）

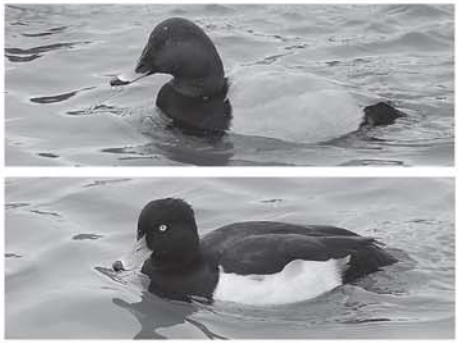
「こだにカモが増えっと、田んぼが荒らさっちぇ、えれぇごとになる」

塩沢の滝湖で、一九八五年ころからカモが急に増えだしました。それを見た人たちが、このまま居座れば、田んぼの苗が踏まれ稲穂も食べられてしまうと心配したのです。カモが増えたのは、ハクチョウがはじめて飛来した時期とほぼ一致します。それは一九八三年の冬のことで、三羽のコハクチョウが越冬したのが最初です。翌年から近くで雑貨店を営む岩渕義寿さん（故人）が餌付けをはじめてからは、年々その数を増し、二〇〇六年一月には一〇九羽を数えるまでになりました。カモはそれと合わせるように増えていったのです。

田んぼを荒らすカモは、一年中生息しているカルガモとオシドリです。しかし、このカモはハクチョウがやってくると、飛び去ってしまうため数が増えることはありませんでした。

滝湖で増えたカモというのは、実はホシハジロやキンクロハジロなどのシベリアからやってくるカモでした。これらのカモは、ハクチョウからおこぼれのエサをもらい、水に潜って水草などを食べます。ハクチョウと一緒にいれば、ハンターに狙われることもなく安全でもあることも知っています。そして湖でひと冬を過ごすと、三月には飛び去ってしまうのです。カモが多くなると被害が出るうわさは数年でなくなりました。

ハクチョウが来てからは、カモの総数は増えていったのですが、数を減らしたカモもいます。増えたのはホシハジロやキンクロハジロで、減ったのはマガモやコガモです。カモの仲間は、水面付近でエサを採る水面採餌ガモと水に潜ってエサを採る潜水ガモに分けられます。数の減ったマガモ・コガモは水面採餌ガモです。一方、数が増えているホシハジロやキンクロハジロは潜水ガモです。ということは水面採餌ガモが減り、潜水ガモが増えてきたという見方もできます。



▲急に数が増えたホシハジロ（上）とキンクロハジロ（下）

只見湖は一九八九年にできた人造湖ですが、オオフラスコモなどのジャジクモソウ科の水草が増えて発電用の水車にからまり問題となったことがありました。只見湖では、この水草を食料にして潜水ガモが増えたではないかと思われます。滝湖では二〇一一年七月の大洪水によって生息環境が流失して、ハクチョウやカモが越冬できない状況が続いています。しかし、河川環境が安定化し植生が回復すれば、水鳥は戻ってくることでしょう。

カモの飛来数が増えるにつれて、いろいろな種類の水鳥もやってくるようになりました。水鳥とは、ハクチョウ類、カモ類、アイサ類、カイツブリ類など水辺域で生息する野鳥のことをいいます。ハクチョウが飛来する前まで見られた水鳥といえば、マガモ、コガモ、カルガモ、カワアイサの四種類くらいで、滝湖を中心に一〇〇羽にも満たないくらいでした。それが二〇一一年一月には、滝湖と只見湖を合わせて一〇九九羽を記録するまでになったのです。そのほか只見湖では、ヒドリガモ、オカヨシガモ、オオバンがやってくるようになりました。珍しいヨシガモ、トモエガモ、ホオジロガモ、カンムリカイツブリも確認されています。

このように水鳥の飛来数や種類数が増えたのは、ハクチョウが水鳥を引き寄せる役割を果たしたと思われます。さらに只見川水系に大きな湖が誕生して、水鳥が越冬できる多様な生息環境が用意されていたともいえます。一〇種類を超える水鳥が越冬する只見町は、内陸の山間地においては重要な地域といえます。